がれきの行方

静岡・島田の選択

〈中〉

予想超える反発抑え込む

剛腕市長「被災地助けたい」

「最初は軽い気持ちで助けようと思った。こんなに反発が大きいとは思わなかった」。静岡県島田市の桜井勝郎市長は、自治会長らに震災がれき受け入れの意向を伝えた昨年12月13日から、正式表明までの3カ月間を振り返り感慨を漏らした。【1面参照】

岩手県大槌、山田両町の復興を支援してきた静岡県の川勝平太知事が県内市長に受け入れを打診したのを受け、ごみ焼却施設に処理の余力があり、がれきの放射線量が家庭ごみと同等だと知った市長は、年内にも受け入れを決める考えだった。

しかし方針が報道された直後から、毎日50～60通の反対メールが届くようになり、挫折したら後が続かない。岩手の被災者をなんとか助けたい。途中でやめたら恥だ」と語っていた。

1月中旬の住民説明会では、子どもを持つ母親らから反対意見が続出。市長は「行だ」と反発したが、市長は試験焼却を提案したが、放射性物質を心配する反対派は拒絶した。

「行政を根っから信用していない人にいくら説明しても無意味。純粋に不安を感じる人のため、試験焼却はやり抜く」「反対は1～2割だが声の大きさは半分以上」と言い切り、ごみ焼却施設のある地区の了解なしに「市の責任でやる」と宣言してのけた。

一転して、2月の試験焼却実施では、国や県と丁寧に放射性物質に関する検査を繰り返し、結果は全て公表した。基準値を大きく下回るデータを突きつけられた反対派は「市長は独断専行だ」と反発したが、市長は「非常事態では、独裁的でないと前に進まない」と反論。「プロセスを大事にして正しいことだから強引にやった」と語る。

がれきの広域処理に向けた取り組みが強化される中でも、各地でくすぶり続ける住民の反発。市長は各地の自治体に「首長は選挙を考えずに腹をくくってやるべきだ。損得ではなく善悪の問題」とアドバイスするが、その手法が全国で通用する保証はない。それでも市長は、島田市の試みを振り返り「被災者の痛みを少しでも軽くできれば本当に幸せ。全国の自治体に広がることを願う」と胸を張った。

震災がれき受け入れを正式表明する静岡県島田市の桜井勝郎市長＝15日、島田市役所で

平成24年3月17日
伊勢新聞